

『枕草子春曙抄』の注釈態度と、その影響力

1) 島内裕子

要旨

本稿は、近世に出版された『枕草子』の注釈書の中から、もっとも広く流布した北村季吟『枕草子春曙抄』（延宝二年・一六七四年成立）に焦点を当てて、その注釈態度と影響力を考察した。『春曙抄』は、本文付きの注釈書で、頭注と傍注の二種類を付けている。頭注は、語句の出典箇所指摘、官位や地名などの説明を書き、その際に典拠となる書物や歌集を挙げる。傍注は本文の行間に、表現をわかりやすく説明したり、主語を示したり、平仮名表記に漢字を宛てて意味を示したりする。大きく分けると、頭注は難語の解説、傍注は文脈の内容の説明、という違いが見られる。『春曙抄』は、注釈するにあたり、先行文学・先行文献を博搜して、文学作品としての正確な読解を志向しているが、時に人々の生き方を戒める教誡的な読み方も示す。

『春曙抄』は、学術的な注釈態度が見られるが、説明自体は簡潔・明瞭なのでわかりやすく、多くの箇所に注釈が付いているので、江戸時代のみならず近代においても、『枕草子』を読む場合は、『春曙抄』で読むことが多かった。したがって、『春曙抄』は、後世への影響力も大きい。本稿では、江戸時代においては、蕪村の俳句に見られる『春曙抄』の影響を考察した。また、近代における『枕草子』の外国語訳には『春曙抄』が活用されていることを考察し、とりわけアーサー・ウェーリ（Arthur Waley）の、『The Pillow-Book of Sei Shonagon』の英訳によるさらなる影響例についても考察した。

はじめに

『枕草子』は古典文学の中でも著名な作品であるが、近世以前の写本の系統が錯綜しており、本文校訂や注釈研究もほとんど行われていなかった。けれども、近世に入ると、それまで写本で伝来していた書物が、版本となって出版され、『枕草子』の注釈書も出版されるようになった。その中で最も広く読まれたのが、

北村季吟によって著された『枕草子春曙抄』十二卷（以下、『春曙抄』と略す）であった。

本稿では、この『春曙抄』に焦点を当てて、注釈態度を考察し、影響力にも注目する。影響力については、『春曙抄』が、『枕草子』の翻訳に果たした役割に目を向けることにより、『枕草子』が世界文学として広く読まれるようになった機縁としての『春曙抄』の役割にも触れたい。

一 『枕草子』の流布と注釈書の成立

『枕草子』は、清少納言（生没年未詳）によって書かれた散文作品である。内容が多彩で、文体も和文を長く書き連ねるかと思うと、単語を列挙するスタイルもある。一般に枕草子は随筆文学と呼ばれることが多いが、内容・文体の多彩さに注目するならば、『枕草子』は、長短さまざまな散文をまとめた「散文集」として捉えられるだろう。

『枕草子』の成立年代は正確にはわからないが、写本の系統は、「能因本系統」「三卷本系統」「前田家本」「堺本系系統」の四分類に分けられている。このうち、「前田家本」は孤本なので、系統はない。「能因本」は、清少納言と時代が重なる歌人の能因（九八八〜？）が所持していた本とされて伝来したことも関わるであろうが、近世において、『枕草子』の主要な本文として流布した。本稿で取り上げる『春曙抄』も「能因本系統」である。「三卷本」は、昭和の時代に、能因本より古い形態であるとする研究が発表されて、次第に『枕草子』の本文の主流になりつつある。現代では、『枕草子』と言えば、「三卷本」を底本とする本が多い。なお、『枕草子』の本文のみの出版としては、慶安二年（一六四九）刊行の七冊本が、近世において流布した。この慶安刊本の系統は、能因本系統であるとする説と、三卷本系統とする説に分かれている。

江戸時代の『枕草子』注釈書を挙げると、次のようになる。

- ① 加藤盤齋『清少納言枕草子抄』（延宝二年五月刊行・一六七四年）
- ② 北村季吟『枕草子春曙抄』（延宝二年七月跋文・一六七四年）
- ③ 岡西惟中『枕草子旁註』（天和元年十一月刊行・一六八一年）

盤齋と季吟の注釈書が相次いで刊行され、その七年後に惟中の注釈書が刊行された。しかし、その後は、『枕草子』の注釈書が刊行されることはなかった。その点、『徒然草』の注釈書の場合、最初の注釈書『徒然草寿命院抄』が、一六〇四年に刊行されて以来、一六八八年の『徒然草諸抄大成』まで、次々と刊行されたことは、『諸抄大成』の凡例に、十三種の既刊注釈書が挙げられていることからも、明らかである。

『枕草子』『徒然草』とともに、一般に「三大古典随筆」と称される『方丈記』の場合は、江戸時代を通じて、注釈書の刊行は、以下の四種である。

- ① 大和田気求『方丈記訓説』（明暦四年・一六五八年）
- ② 加藤盤齋『方丈記抄』（延宝二年・一六七四年）¹⁾
- ③ 仁木宜春『方丈記宜春抄』（元禄九年・一六九六年）
- ④ 槇島昭武『方丈記流水抄』（享保四年・一七一九年）

なお、今挙げた『枕草子』と『方丈記』の注釈者の中には、『徒然草』の注釈書も書いた人々もいるので、その注釈書を挙げ、それ以外の注釈も付記すれば、次のようになる。

- ① 大和田気求『徒然草古今抄』（万治元年・一六五八年）、他に『方丈記』の注釈。
- ② 加藤盤齋『徒然草抄』（寛文元年・一六六一年）、他に『枕草子』と『方丈記』も注釈。
- ③ 北村季吟『徒然草文段抄』（寛文七年・一六六七年）他に『枕草子』と『源氏物語』も注釈。
- ④ 岡西惟中『徒然草直解』（貞享三年・一六八六年）、他に『枕草子』の注釈。

以上をまとめてみると、三作品自体の成立順は、『枕草子』『方丈記』『徒然草』

であるが、成立が最も遅い『徒然草』の注釈書が早く、作品の成立と逆の順序で注釈書が刊行されて、『枕草子』が最も遅い。第二に、複数の注釈書を書いた著者がいることで、時代の古い順に挙げれば、大和田気求は、同じ一六五八年に、『方丈記』と『徒然草』と両方の注釈書を刊行している。加藤盤齋は、『徒然草』『方丈記』『枕草子』の順に、三作とも注釈書を著した。盤齋は『源氏物語』の注釈書は著していないが、『伊勢物語』や『土佐日記』の注釈書もある。北村季吟は、『徒然草』『枕草子』の注釈書を書いたが、他に大著『源氏物語湖月抄』もある。ただし、『方丈記』の注釈書はない。岡西惟中には、『方丈記』と『徒然草』の注釈書がある。

以上、三作品の注釈書の刊行時期と期間をもう一度整理して比べると、『徒然草』注釈書の刊行期間は、江戸時代初期の『寿命院抄』（二六〇四年）から『諸抄大成』（一六八八年）までの八十余年にわたり、間断なく、次々と刊行されてきた。しかも『諸抄大成』で集大成されたすぐ後にも、『徒然草吟和抄』（一六九〇年）²⁾、『徒然草絵抄』（一六九一年）³⁾が刊行されている。これらは二種とも絵入り本である。

『枕草子』の注釈書だけでなく、『方丈記』と『徒然草』にも触れたのは、『枕草子』という作品は、現代でこそ著名で、『源氏物語』と並び称されることもあるが、注釈書があまり刊行されなかったことに、改めて注意を喚起したかったからである。

『方丈記』は短編であることから四種の注釈書で、研究がほぼ尽くされている観があるが、『枕草子』は『徒然草』の優に二倍もある長編であるし、宮廷生活を描く段も多いので、有職故実に詳しい和学者でなければ、注釈研究に取り組むのが困難であつたらう。

このような状況の中で、『春曙抄』は詳細であると同時に、個々の注釈自体は簡潔明瞭なので読みやすく、わかりやすい注釈書である。このことが、長期間に渡る『春曙抄』の命脈を保たせたのであり、後続の『枕草子』の注釈書が出現しにくかった要因でもあつたのではないだろうか。まさに『春曙抄』は、近世から近代に至るまで、広く読み継がれてきた注釈書であつた。

現代では三巻本による『枕草子』が主流となっているが、近世から近代にかけて、『春曙抄』が果たしてきた役割は大きく、また、『枕草子』が外国語に翻訳する場合にも、『春曙抄』の果たした役割は大きい。本稿で、『春曙抄』の注釈態度の特徴について、考察する所以である。

二 『春曙抄』の構成

『春曙抄』は十二巻からなる『枕草子』の本文付き注釈書である。注釈書の中には、たとえば、『徒然草』の最初の注釈書である『徒然草寿命院抄』のように、本文は掲載せずに、語釈を付ける言葉の部分だけを切り出して注釈するものもある。ただし、このようなスタイルだと本文を別に用意する必要があるもので、一般には本文と注釈は一体となっている。

『春曙抄』の全体の構成を把握するために、以下の記述は、架蔵の『枕草子春曙抄』十二巻六冊【図版1】によって、各巻の丁数、冒頭と末尾の段などを、具体的に見てゆく。その際に、池田亀鑑校訂『枕草子（春曙抄）』（上・中・下）を適宜、参照した。

・『枕草子春曙抄 一』

『春曙抄』第一冊は、発端部と巻一と巻二からなる。発端が五丁。巻一が三十三丁。巻二が三十八丁である。

各頁の柱は、上部に「春曙一」とあり、以下各丁ごとに「春曙」は共通で、第一冊は、発端に続いて、前半が「春曙二」、後半から「春曙三」で、同様に続き、第六冊の後半が「春曙十二」である。第一冊の柱の下部は、冒頭の五丁は、順に「発一」「発一ノ一」「発二」「発三」「発四終」となっている。

その次の丁から、『枕草子』の本文を下に、上部に頭注が書かれる。本文の所に傍注がある。巻一は「春八あけほの」から始まり、三十六丁ある。

第一冊の後半は巻二で、「すさまじきもの」から始まり、三十八丁ある。丁番号は一から始まる。一卷末尾と二巻冒頭が見開き頁になる【図版2】。三十八丁裏の末尾に「春曙抄二終」とある。以下、巻十二まで、各巻末尾に同様の記述がある。ちなみに、図版1でわかるように、巻一末尾には、このような記述はない。

・『枕草子春曙抄 二』

『春曙抄』第二冊は、巻三と巻四からなる。巻三は「木の花は」から始まり、三十一丁。三十一丁裏の末尾に「春曙抄三終」とある。巻四は「ありがたきもの」から始まり、三十一丁ある。三巻と同様に末尾に「春曙抄四終」とある。

・『枕草子春曙抄 三』

『春曙抄』第三冊は、巻五と巻六からなる。巻五は「めでたきもの」から始まり、二十八丁ある。末尾に「春曙抄五終」とある。巻六は「つくも所の別当する比」から始まり、三十四丁ある。末尾に「春曙抄六終」とある。

・『枕草子春曙抄 四』

『春曙抄』第四冊は、巻七と巻八からなる。巻七は「むとくなる物」から始まり、三十八丁ある。末尾に「春曙抄七終」とある。巻八は「いやしげなる物」から始まり、三十六丁ある。末尾に「春曙抄八終」とある。

・『枕草子春曙抄 五』

『春曙抄』第五冊は、巻九と巻十からなる。巻九は「宮にはじめてまいりたる比」から始まり、三十丁ある。末尾に「春曙抄九終」とある。巻十は「むまや」から始まり、二十八丁ある。末尾に「春曙抄十終」とある。

・『枕草子春曙抄 六』

『春曙抄』第六冊は、巻十一と巻十二からなる。巻十一は「御経のことにあすわたらせおはしまさんとて」から始まり、二十六丁ある。末尾に「春曙抄十一終」とある。巻十二は「家ひろくきよげにて」から始まり、三十四丁ある。最終丁の柱には「三十四終」とある。三十四丁裏は季吟による漢文の跋文である「北村季吟書」とあるが、無刊記。三十四丁裏は季吟による漢文の跋文である【図版3】。

三 『春曙抄』の紙面構成と注の形態

『春曙抄』の注釈態度を考察するにあたり、最初に紙面のレイアウトと本文表記を見ておこう。頁の上部、三分の一くらいのスペースが「頭注欄」である。その下に本文が入る【図版4】。頭注欄には、本文から語句を短く切り出して、その出典の指摘や、意味を平易に示す。本文欄は、頁の三分の二くらいのスペースで、頭注欄とのバランスもよく、読みやすい。本文は、漢字平仮名交じりの表記で、平仮名が主体であるが、頭注欄および傍注で、適宜漢字を宛てて意味を取りやすくすることが多い。

冒頭部で言えば、本文の一行目は有名な、「春八あけほの。やうくしるくな

りゆく。」とある。この部分を切り出して頭注では「春は曙やうく／＼白くなりゆく」と表記し、濁点は省き、平仮名に漢字を宛てている。ただし、濁点については、本文と頭注の両方に濁点が付いている箇所も多いので、必ずしも今見ている冒頭一行目のように、本文に濁点が付き、頭注で濁点が付いていないというわけではない。

本文の「あけほの」に対して、頭注では「曙アケホノ 朧同」とあるのは、本文の「あけほの」に漢字の「曙」を宛て、さらに「朧同」とあるのは、夜明けをあらわす漢字「朧」も同じく曙のことであると示している。頭注では、さらに「まづ時節の景を書き出でたり。爾雅ニ云ク春ハ青陽為リ、万物發生ス。はるはよろづの物生ずる初めなれば発端に、春は曙を賞していへる。少納言の心あらはれて、枕双紙一部の形容もこもり侍る也」というように、古代中国の字書である『爾雅』を引用したり、「春は曙」の一言に清少納言の心が明示されて、『枕草子』全体を象徴するなど説き、簡潔で明快な『春曙抄』の注釈態度が、早くも冒頭で明記されている。

その後「其の次に、夏は夜を賞したる。以下、実に奇妙にや。」と、ごく簡単ではあるが、各季節ごと、最も相応しい時間帯を挙げている書き方を「奇妙」すなわち並外れてすぐれていると評している。さらに「此の後、堀川百首、六百番哥合なども、春の曙と言へる題を出だされ侍り。其の外、哥にあまた詠めり。」とあるのは、『堀川百首』や『六百番歌合』を始めとして、それ以外にも多くの和歌に「春の曙」という言葉が詠まれていることに触れて、和歌史を視野に収めて、『枕草子』の影響力に言及している。

次の頭注箇所は、「むらさきだちたる雲の」を切り出して、「曙の雲のうす黒きに、日影うつろひて、紫の色めきたる也。」と、この箇所の意味内容を、わかりやすく噛み砕いて記す。

このように、一頁の頭注欄に収まる分量の中に、さまざまな情報を伝え、見事な注釈であると思う。字句の表記、意味内容、表現の出典や関連文献、『枕草子』の文学性などを幅広く、いろいろな角度から過不足なく注釈を付けるのが『春曙抄』の頭注欄の特徴であり、そのことが、冒頭部によく表れている。なお、頭注欄に収まり切れない時は、本文の区切りの後に、頁の上から下まで続けて書き、それが数行にわたる場合もある。

『春曙抄』では、頭注の他に、本文の右側に細字で傍注が付いている。『春曙抄』の本文は、一面が十二行である。傍注はほとんどの頁に付いているが、ぎっしりと行間を埋めるほど詳しく付けることはせず、頁による粗密があるのも、読

みやすい。冒頭の頁を例に取って、傍注の付け方の特徴を見ておこう。

二行目の本文の「あかりて」の右に、「あかくなりたる也」と傍注があり、七行目の「ちかくなり」の右に、「日の入がたちかき也」とあるのは、どちらも意味を解説している。同じ七行目の「鳥」には、「からす」と読み仮名を付けている。八行目の「みつよつ」の右に、「文体奇妙にや」とあるのは、この箇所に対する評言である。九行目から十行目にかけて「まいて雁などのつらね」の部分に、「鳥さへあるにまして雁は面白きと也」という傍注を付けて、「まいて」のニユアンスを汲んだ解説をしている。

傍注の場合、注を付けるスペースは、基本的に本文の長さに合わせて書くので、ごく簡略になるが、本文を読みつつ同時にすぐ右側にわかりやすい注が付いているのは、読者にとって便利なことである。この頁の本文には、会話文はなかったが、『枕草子』は全体的に見ると会話の場面が多い。そのような場面では特に、傍注スタイルが、主語を示すのに適している。その部分の話者が注記されていると、文脈がわかりやすくなる。また、会話場面に限らず、登場人物が多い場合なども、傍注によってその箇所の主体が明示されるので、状況がわかりやすく、読者にとって、有益である。

以上、傍注の機能をまとめると、その箇所の本文の意味内容がすぐ理解できるということに尽きよう。文意の理解、主語主体の明示、漢字の読み方。この三点が、作品を読み進めるうえで必須のものである。それに加えて、先に取り上げた、頭注の機能、すなわち、出典明示、関連資料の補足、ある程度の分量にわたる本文の流れの把握などが示される。「本文・頭注・傍注」をワンセットとしている点に、『春曙抄』の読みやすさ、わかりやすさが求められよう。このスタイルは、季吟が『源氏物語湖月抄』ですでに採用しているので、『湖月抄』の後になる『春曙抄』でも使っているのは、当然かもしれないが、『湖月抄』以前の注釈書である『徒然草文段抄』では、このスタイルは取っていない⁸⁾。

四 『春曙抄』の注釈態度

(一) 有職故実と歌枕 卷一の世界

北村季吟は、『枕草子』という作品をどのように理解し、注釈を付けることによつて何を読者に伝えようとしたのだろうか。『春曙抄』における季吟の注釈の特徴を考察することによつて、そのことを明らかにしたい。

ところで、『枕草子』は多彩な内容からなる作品であり、そこに書かれている出来事なども、時間の前後関係が、順不同に書かれているので、作品自体をどのように把握するか、難しい面がある。そのことに鑑みて、類聚・日記・随想の三種類に内容を分類することが行われてきた。ただし、本稿では、類聚章段はいろいろな項目を列挙するので「列挙章段」と呼称し、日記章段と随想章段は、宮廷生活を描く場合が多いので、まとめて「宮廷章段」と命名した。以後の論述の中では、「列挙章段」「宮廷章段」という名称で各段を把握したい。

ところで今、各段と書いたが、『枕草子』は、章段に区分して番号を付すことが江戸時代に統一的行われなかったため、現代に至るまで、段の区切り方はさまざまである。したがって同じ章段番号であっても、本文の箇所は異なってしまう。『春曙抄』においても、章段番号は付けられていない。

さて、『春曙抄』では、数多くの有職故実書によって、注釈を付けることが顕著に見られる。と言うのも、枕草子には宮廷生活にかかわる宮廷章段が多いので、儀式やしきたり、特有の言葉などを説明する語釈では、おのずと有職故実書による解説が有効性を発揮することになる。

先にも述べたように、『春曙抄』の巻一の冒頭部には、枕草子全般にかかわる「発端」が五丁にわたって書かれている。そこには、清少納言とその家系、定子と中関白家、清少納言の晩年、枕草子という題号、諸本と尾州本の奥書、尾州本の流布状況などを記した最後に、『春曙抄』を書くにあたって参照した書目を列挙している。その筆頭に、「禁中の事どもは、延喜式、西宮抄、北山抄、又、此の双紙より後の書ながら、其の事のためよりあれば、江次第、禁秘抄、雲凶抄、(以下略)」と数々の有職故実書を挙げている。また、その少し後で、「名所は、歌枕等ありといへど、此の双紙をよく沙汰せさせ給へる故に、八雲御抄をとり分きて用ひ侍り。」と述べている。

このような参考書目を眺め渡したうえで、改めて『春曙抄』巻一を読んでみると、巻一に収められている『枕草子』の諸段は、まさに、宮廷と和歌の世界が描かれていることに気づかされる。『枕草子』に限らず、古典文学は、複数の巻・冊によって成り立つ場合が多いが、注釈書は本文以外に注釈部分の分量も多くなるので、巻・冊も大部になることがある。『春曙抄』も十二巻である。となると、各巻の丁数も重要で、先に見たように、架蔵の『春曙抄』は十二巻六冊であるが、各巻各冊の丁数は、ほぼ平均している。

巻一は、「春は曙」から始まり、「清涼殿の丑寅の隅の」までを取める。この巻一の全体を大きく捉えれば、前半が宮廷章段、後半が列挙章段からなり、列挙章

段は、「山は」「峰は」「原は」などというように、地理に関わる。ここではこれらの地名の注釈によって、歌枕が列挙章段を形作っていることが読み取れる。そして、巻二は「すさまじきもの」「たゆまるるもの」などの「もの尽くし」がほぼこの巻を構成し、巻三は、「木の花は」「池は」「節は」などの「は尽くし」から成る。巻四は、それ以前の各巻と比べると「ありがたきもの」「内の局は」「職の御曹司に」「あぢきなきもの」というように、各種の書き方が次々に現れ出てくる。北村季吟は、各巻の区切りをどこに置くか、よく考えて『春曙抄』を十二巻にしたのであろう。清少納言の筆の緩急や、視点の変化が見渡しやすい各巻の構成であるように感じられる。

ところで、巻一が内包する世界を大きく把握すれば、前半が宮廷章段、後半が歌枕と関連が深い列挙章段であることは、『枕草子』の基盤が、宮廷と和歌という二つの要素からなることをおのずから示している。季吟は、成立が『枕草子』の後であっても、『八雲御抄』が『枕草子』のことをよく引用している事などに鑑みて、歌枕に関する段は『八雲御抄』を特に活用したと明記している。

季吟にとって『春曙抄』は、数々の古典注釈を行ってきた自分自身の経験の蓄積のうえに立つものであり、『枕草子』の注釈書を書き上げることができたのは、単にそれ以前に『徒然草文段抄』『源氏物語湖月抄』を刊行していたことにとどまらず、すでに三十年近く前に、歳時記『山之井』や俳書『師走の月夜』を二十代の前半から半ば過ぎにかけて、執筆していたという経緯があったからであると考えられる。季吟は、『春曙抄』の総論解説で、先ほど引用した参照書目の直前に、「此の草紙に、中古に季経の抄十冊ありと聞き伝へ侍れと、いまだ見侍らず。只、多年此草紙をよみて、心に会する事あれば、食をも忘れて、かきくはへおき侍りし。」と述べている。

『春曙抄』跋文のわずか二箇月前の延宝二年五月に、加藤盤齋が『清少納言枕草子抄』十五巻を刊行した。「多年此草紙をよみて」という一言には、自分こそ、『枕草子』を早くから読み込んできたし、気づいたこと、それは語句の出典や、文脈・構成などに関することなどであろうが、手元の『枕草子』に書き加えてきたのだと自ら述べていることに従うならば、これらの言葉はそのまま、『春曙抄』前史としての、自己の『枕草子』研究の蓄積を明示していると理解される。

『山之井』(四巻本)を、数えて二十三歳の年の冬至に完成させ、それから一年余り後の慶安元年(一六四八)正月には、五巻本として刊行した季吟の誇りもあろう。『山之井』は、俳諧歳時記と旬日記からなる俳諧学習書である。そこに『枕草子』という書名は見えないが、季語を挙げてそれぞれに説明文を付けてい

る文体が、『源氏物語』にあらず、『徒然草』にもあらぬ文体で、一番近いのが『枕草子』であるように思われる。慶安二年にはその名も『枕草子』ゆかりの『師走の月夜』（『独琴』）を書いた。『師走の月夜』は、俳諧の学習書であると同時に『枕草子』的な散文と句からなる句日記も含む。季吟の中で、この頃はあくまでも俳諧が中心であるが、このような最初期から、季吟の和文執筆に、『枕草子』が大きな存在感を持っていたことに注目したい。ちなみにこの慶安二年は、『枕草子』の刊本が出版された年でもあり、この「慶安刊本」（七冊）は、広く流布して、『枕草子』の注釈書類の底本となった。

ところで『師走の月夜』の奥書には慶安二年（一六四九）と書かれているが、これが実際に刊行されたのは、二十五年も後の延宝二年（一六七四）であるのが不審であるが、延宝二年五月刊行の加藤盤齋の『清少納言枕草子抄』に対抗しつつ、既に出発点として、二十数年前からの枕草子体験を、この時期に提示するものとして、『師走の月夜』を出版したのではないだろうか。しかも、もともとこの題は『独琴』だったのを、出版に際して『師走の月夜』としたのは、やはりこの言葉によって、『枕草子』を強く印象付けるねらいがあったのではないか。

『春曙抄』の跋文は、盤齋にわずかに遅れること二箇月の延宝二年七月である。この時、ほぼ同時に『師走の月夜』も刊行したことは、その奥書に慶安二年とあることが、何より自らの『枕草子歴』を明示するものだったからではないだろうか。

さて、以上のような季吟の「枕草子歴」の長さを勘案しつつ、『春曙抄』の巻一を読むと、「山は」「川は」などの列挙章段が、このあたりすべて地理に関わるものであり、それらの注を主として『八雲御抄』によったとするのも、『山之井』の執筆体験から、『八雲御抄』その書の意義を認識したことから来ていると思われる。

さらに季吟には俳書『増山井』（寛文三年・一六六三）がある。『山之井』の季語解説文は、かなり自由な書き方で随筆性も含んでいるが、『増山井』の季語解説は、格段に文章を刈り込み、辞書的な短文になっている。と同時に典拠となる書名を挙げて、記述に学問的信頼感を強く漂わせている。『山之井』と比べて『増山井』には、和学者としての成熟が見られる。その『増山井』には、『枕草子』の書名も登場する。「増山井四季之詞 上」は春から始まるが、春の詞は、正月・四方拝・歯固……と続く。その「歯固」の説明文を挙げて、『増山井』の記述スタイルを紹介し、併せてここに『枕草子』からの引用が出てくるのを見よう。

歯固ハガタメ

餅。もちるかゞみ。鏡餅、餅。大根いはふ、同。ゆづりは。齒朶、餅。うらじろ、同。おやこ草。

世諺問答ニ云ク、はがためといひてもちるか、みにむかふ事は、いかなるゆへぞや。答、人は齒を以て命とする故、はといふ字をよはひ共よむ也。齒固はよはひかたむる心也云々。在家の鏡餅にも、しだゆづりはをしき待るに、清少納言枕草子に、ゆづりはの事をいふとて又よはひのぶるはがためのぐにしてつかひたしめると云々。一名をおやこ草と云よし蔵玉集にあり。あるはしだをおやこ草と云ともいへり。うらじろ、しだの事也。又はがための具に大根をもちゆる事、河海抄に見えたり。其故にや、一名をかゞみ草といふよし蔵玉集にあり。

まず季語を挙げて、その季語の類語を列挙する。その後、解説文を書く。季語の中でも、有職故実に関する語の解説はかなり詳しく、各種の典拠を示して、そこからの引用も豊富である。『増山井』においては、特に宮中行事は、有職故実書や『源氏物語』の注釈書、歌学書・俳書などを引用しながらわかりやすく解説している。『増山井』は俳諧を学ぶ人々のための用語解説集であるが、『山之井』が、用語解説と例句からなるのと異なり、例句は挙げていない。したがって『増山井』は、江戸時代初期の有職故実観がよく現れた書物になっていると同時に、季節順に配列された古典文学用語辞典としての機能も有する。

『増山井』全体で最も頻繁に引用されているのは、一条兼良が著した有職故実書『公事根源』である。ちなみに、『山之井』では引用書目が書かれておらず、季語の説明は、和文である。今挙げた『増山井』の「歯固」の項で、「清少納言枕草子」の名前を挙げて、原文から「又齡延ぶる齒固の具にして使ひたしめるといふ箇所を引用している。なお、「餅」とあるのは「俳言」のことである。

ゆづり葉を飾るのは年末の行事でもあるので、「増山井四季之詞 下」の末尾近くに位置する「玉祭り」の項で、再び枕草子からの引用があり、ここでは徒然草の一節も典拠として出てくる。

玉祭り

つれく草に、なき人のくる夜とて玉まつる云々。枕草紙に、ゆづり葉をなき人のくひ物にしくといへるなど、みな歳の終の玉まつり也。報恩経に、十二月晦日の午時来りて、正月一日卯時に帰る云々。

一年の季語の、最初と最後の部分に位置する説明文に、『枕草子』や『徒然草』が引用されていたのは、それだけ、『枕草子』と『徒然草』が、季節感に満ちた作品であることの証しでもある。

なお、『枕草子』の注釈書に『源氏物語』が出てくるのは、意外なようであるが、『徒然草文段抄』でも、『源氏物語』を引いたりすることがあったので、季吟にとつては、馴れ親しんだ注釈スタイルといつてよいだろう。そもそも、江戸時代における古典注釈書の嚆矢となった『徒然草寿命院抄』（一六〇四年）において、『徒然草』の語釈を、『源氏物語』の注釈書や『八雲御抄』によって付けることは行われていた。

(二) 教誡を読み取る

北村季吟は、延宝二年（一六七四）に『春曙抄』を完成させた。残念ながら『春曙抄』の刊行時期が不明で、刊記を持つものとして現在知られているのは享保十四年（一七二九）版がもつとも古い。けれども、『春曙抄』成立を挟んで、『源氏物語湖月抄』の成立・刊行があったし、『徒然草文段抄』の刊行は寛文七年（一六七七）である。季吟五十代の初めである。季吟はこの後、三十年を生きて、宝永二年（一七〇五）数えで八十二歳で亡くなった。辞世の歌として知られている次の和歌にも、彼の八十二年間の時間の豊かさが満ちており、むしろこのような辞世歌は珍しい。

花も見つ時鳥を待ち出でつこの世後の世思ふことなき

季吟は五十一歳から五十二歳にかけて、『源氏物語』と『枕草子』の、双方の注釈書を一気に世出した。その十五年後、季吟は幕府に召されて江戸に出た。それからの十五年間を季吟は「幕府歌学方」として古典の最高權威の地位にあり、息子や孫とともに北村家の古典学を伝えた。そのような人生を辿った古典学者である季吟は、『春曙抄』の注釈にふと、自らの人生観を彷彿させるような思いを「愚按」として、紛れ込ませている。それらの中から、具体的にいくつか取り挙げて、季吟の注釈態度を垣間見てみたい。

すぐれた注釈書とは単に博覧強記から生まれるものではない。人生そのものに対する自分自身の見方や価値観、ひいては自分の生き方の反映がおのずと現れるものであろう。注釈書を書くほどある作品の全貌に深く沈潜したならば、そこに描かれた世界は、もはや自分自身の生き方と分かちがたく、生成してゆく。その

プロセスこそが、注釈作業であろう。

徒然草の注釈書『野槌』を著した林羅山は、徳川家康没後に訪れた沈潜の時期に、『徒然草』の注釈書をまとめることによって、自分自身の姿を映し出す鏡としての『徒然草』を見出し、『徒然草』第二百一十一段の、「よろづのことは頼むべからず」という名句の意味を感得したのだった。

北村季吟は、『春曙抄』の注釈の中で、時に、読者へとも、自分自身へともつかぬような一言を書く。たとえば、巻一の「にくきもの 急ぐ事ある折に、長言する客人。」と始まる段の最初の頭注は、「にくき物」と切り出して、次のように書く。「この一段清少の筆にまかせたるすさびながら、自他の心づかひになるべき事おほし。心をつけて見侍るべし。」と云うのである。又、この段の後の方で「物うらやみし、身の上歎き、人の上言ひ、露ばかりの事もゆかしがり……」と始まる部分がある。その最初の「物うらやみし」に傍注を付けて、「此の一章、実に人の思ふべき所也」と書いている。つまり、人としてのあるべき心遣いに注目して、「心をつけて見るべし」「人の思ふべき所也」と注意を喚起するのである。

巻一には、「文ことばなめき人こそ、いとどにくけれ。」と始まる段がある。この段前後には、「憎きもの」の列挙が続いている。その中で、ここは手紙の文章が無礼なのは憎らしいと書いている部分である。「さるまじき人のもとへ」という本文を切り出して、次のような頭注を付けている。

さやうに尊敬すまじき人へ、あまり慇懃なる文詞も尤わろけれど、先、世をないがしろに、書きなしたるこそ、我かたへ得たるに、にくきはことわり、猶、人のもとへ、人のやりたる文の詞にても、なめきはにくこそあれと也。よく心をつけて見るべし。

この部分に対応する本文は「さるまじき人の許に、あまり畏りたるも、げにわろき事ぞ。されど、我が得たらむはことわり、人の許なるさへ、（文ことばが無礼なのは）にくこそあれ。」であるので、この部分を頭注でかなり詳しく、逐語訳とも言える書き方で説明している。そのうえで、「よく心をつけて見るべし」、つまり、手紙の文章は、相手に失礼にならないように、十分に気をつけて書かなくてはならないという、季吟自身の言葉を添えているのである。

巻四の頭注にも、季吟の考えが示されている。この段は、宮廷人の振る舞いの良し悪しについて述べた段で、所得顔に振る舞う男性貴族たちに対して清少納言

が、「うげばりて」という詞で批判している箇所を捉えて、季吟は「此双紙の心は、さやうに我は顔にはえたてられず、少しそばめたるさま也」と評している。つまり、季吟は『枕草子』に顕著な、鋭い人間観察は、対象から少し離れて、傍観者の立場で見ているところから来ていると判断しているのである。このような距離感を持って外界と接する態度は、『徒然草』の第三百二十七段にある「万のこと、余所ながら見る」という兼好の態度とも通底するものであり、あるいは『徒然草』経由で、対象と距離を置く姿勢を、『枕草子』の中に読み取っているのではないだろうか。

これらの例からも、北村季吟は『枕草子』に、清少納言の人間観や心遣いや振る舞いへの関心に注目して、この作品から、今を生きる現実社会の中での人間のありかたを提示する文学としての一面を読み取っている。これらは、一言で言えば「教訓読み」であり、それは『徒然草』を読んで感じる人生のあり方とも通底するものである。ただしこれらは、単に教訓的な態度を文学作品の中から抽出する「教訓読み」ではなく、そのような読み方ができるとすれば、そのことこそが人間が文学に求める姿であったことになる。

季吟よりも、ずっと早く、鎌倉時代にまとめられた『十訓抄』は、教訓說話集であるが、そこに清少納言のことが出てくる。「第七 思慮を専らにすべき事」の三十一話に、「清少納言の『枕草子』といふものにいへるは」という書き出しで、ある男性が女性のもとを訪れて夜も更けてくると、その男の従者が早く帰りがたがって、「夜の更けたる。雨の降りげな」などと聞こえよがしにつぶやくのは、その従者もさることながら、主人の男性にもがっかりさせられると、清少納言が書いているのは、「げにことわりなれ」つまり、まことにもっともだと共感している。『春曙抄』の卷三に出ている話である。このような日常生活の中での振る舞いの良し悪しを問題にする段が、早くから注目され、しかも『十訓抄』では清少納言の名前も出して、その考えに共感を示しているのは、『枕草子』という作品に作者である清少納言の人間性の反映を見る点で、季吟の読み方と重なる。いずれにしても、清少納言の個性が、『枕草子』の魅力を形作っているのである。以上、『春曙抄』における注釈態度を考察した。注釈研究は、そもそもは語釈や文脈の読解から成り立つが、その中に、時として注釈者の意見や感想が出てくることもある。それが注釈書の思いがけぬ魅力にもなる。そして、「今」ここにある現実としての日常生活の振る舞いや心懸けは、『枕草子』においては、具体的・日常的な振る舞いや心懸けへの価値判断として明確に立ち顕れ、それを季吟がキヤッチする。そして季吟が今度は、読者に向かって素早く手渡す。そのよう

な清少納言・北村季吟・読者という緊密な伝達システムが『春曙抄』という注釈書であり、それは啓蒙性とか、教誠性・教訓性というよりも、今をどう生きるかという、人間本来の生き生きとした精神運動の連環として、命脈を保ち続けている。それが『枕草子』の生命力であり、その枕草子を誰もが読める本として提供した『春曙抄』の意義は大きい。

五 『春曙抄』の影響力

(一) 蕪村と『春曙抄』

『春曙抄』の注釈態度を見てきたが、次に、江戸時代から近代まで広く流布した『春曙抄』の影響力について考察しよう。尾形仿校注『蕪村俳句集』（岩波文庫）から、『春曙抄』や『枕草子』にかかわる句を挙げて、内容別に分けて並べてみた。

冒頭に、『春曙抄』の書名を織り込んだ句を掲げた。二句目から六句目までは、『枕草子』を詠んだことが明らかでない句である。七句目から十二句目までは、蕪虫を詠んだ句であるが、『枕草子』と直接に関わるのは「鳴く」という言葉を含むものに限るべきかもしれない。ただし、蕪村に蕪虫の句が多いこと自体に、『枕草子』との関連性を感じる。

- ・ 春風をつまかへしたり春曙抄
- ・ 曙のむらさきの幕や春の風
- ・ 木のはしの坊主のはしやはちた、き
- ・ みじか夜を眠らでもるや翁丸
- ・ 春雨に下駄買泊瀬の法師かな
- ・ 関の戸に水鶏のそら音なかりけり
- ・ みのむしや秋ひだるしと鳴くなめり
- ・ 子鼠のち、よと啼くや夜半の月
- ・ みのむしの得たりかしこし初時雨
- ・ みのむしはち、とも啼くをかたつぶり
- ・ みの虫や笠置の寺の籠衆の中
- ・ みのむしのぶらと世にふる時雨哉

蕪村の句では、何より『春曙抄』という書名を詠んでいることが特筆される。その他に『枕草子』と関わる句は、十一句あった。これらの句の背景のすべてに『春曙抄』があるという確証はないが、下駄を買う泊瀬（長谷寺）の僧を詠んだ句があることよって、蕪村が『枕草子』を詠んだのは、やはり『春曙抄』の読書体験とみてよいのではないかと思う。というのも、現在刊行されているほとんどの『枕草子』が「三巻本系」を底本としているが、この長谷の僧の話は「三巻本系」の『枕草子』には入っていないからである。それに対して、『春曙抄』には入っている。

古典を詠んだ蕪村の句としては、『徒然草』と『源氏物語』を詠み込む方がずっと多く、『枕草子』を詠むのも、蕪村における古典詠の一環なのかもしれないが、『枕草子』詠には独自の哀感・哀愁が漂うところに特徴を感じる。「春風の」「曙の」の両句は、美しい色彩感に満ちているが、「木のはしの」「翁丸」「泊瀬の法師」、そして一連の蓑虫詠も、一筋の哀愁が漂う。それはあるいは、『枕草子』自体の奥深いところに流れる悲哀感を蕪村が感じ取ったことの反映であろうか。明治時代の文学者樋口一葉も、清少納言に「野辺の捨て子」のイメージを感じ取って、みずからの寄る辺なさを重ねている¹²⁾。

(二) 『枕草子』の翻訳と『春曙抄』

近代になると、日本文学の翻訳が行われるようになり、『枕草子』の翻訳も各種、出版された。一八九九年のアストンによる『日本文学史』（英語）、一九〇九年のフロレンツによる『日本文学史』（ドイツ語）、一九一〇年のルヴォンによる『日本文学詞華集』（フランス語）によって、古代から近代までの日本文学が、世界に紹介された。これらの本には、日本文学の概説だけでなく、作品の一部が翻訳されているので、日本文学が世界文学として読まれるようになった。ルヴォンは、北村季吟の『春曙抄』を詠んだことを明記している。そのルヴォンの『日本文学詞華集』を読んだフランスの詩人・劇作家のクロードルは、「日本文学小史」という講演録の中で、『源氏物語』には触れていないが、『枕草子』には触れている。

その後、アーサー・ウエーリは、『枕草子』の英訳『The Pillow-Book of Sei Shonagon』を、一九二八年に刊行した。あたかも、一九二五年から一九三三年まで、『源氏物語』の英訳を刊行している最中であつた。北村季吟も『源氏物語湖月抄』の成立・刊行の間の時期に、『春曙抄』をまとめているので、不思議な暗合である。

このウエーリ英訳『枕草子』は、独自の構成によって、『枕草子』の内容が並べ替えられている。それは、『枕草子』から主として年代が知られている宮廷章段を、古い順に並べたものである。したがって、最初の方に、清少納言が中宮定子に仕えた頃の話が置かれている。そのような配列構成とあるいはかかわる享受ではないかと思われるのが、吉田健一の長編評論『昔話』に書かれている清少納言と大納言藤原伊周とのエピソードである。このエピソード自体は、『春曙抄』で言えば、後半の「宮に初めて参りたる頃」に書かれている。清少納言が中宮定子に初めて仕えることになって、皆が集まっている定子の御前近くに出入れず、後ろの方に控えていたところ、伊周が清少納言の傍に来て話し掛けたりするので、清少納言が恥ずかしがって扇で顔を隠していたのに、伊周にそれを取り上げられて困ったという話である。

その場面を吉田健一は、『昔話』（一九七六年）の第五章で洗練された文明の象徴として紹介した。その紹介文のなかで、伊周のことを「若い兄弟」と書いているのだが、『枕草子』の原文では、この場面に伊周の年齢のことは書かれていない。けれども、ウエーリの英訳では十八歳の若者と書かれている。ウエーリは枕草子の英訳の中で、北村季吟の名前を挙げており、『春曙抄』を底本としていることを伺わせる。枕草子は、『春曙抄』というすぐれた注釈書によって、読み継がれてきた。そのことがさらなる広がりとなって、世界の中で枕草子が読まれる基盤を提供したのである。

おわりに

本稿は、北村季吟による『枕草子』の注釈書『春曙抄』について考察してきた。『春曙抄』は、季吟の古典注釈を代表するものであり、現代は、『枕草子』研究が「三巻本」中心になってきているので、やや忘れられつつあるようにも思われるが、現代に至る『枕草子』研究の基盤が『春曙抄』によって確立されたことの意味は大きい。

季吟は初め俳書の刊行から出発したが、季語の解説を書くにあたり、さまざまな有職故実書や、『源氏物語』や『徒然草』の注釈書、歌学書などを博搜し、和学者としての学問的な蓄積を持っていた。本稿では触れられなかった、松永貞徳門下としての勉学・教養もあつた。それらのすべてを投入して書かれた『春曙抄』は、簡潔明快であると同時に、季吟の学問に支えられた奥深い枕草子の注釈書となり、それが刊行されることによって、枕草子は初めて、多くの人々の「共

通古典」となった。

『春曙抄』に点在する、日々の振る舞いと心遣いの大切さを『枕草子』から読み取る見方は、季吟自身の人生観の反映でもあったろう。そのことは、文学に込められた人間の生き方を受け取り、さらに文学の命脈をつなぐ行為として、北村季吟の注釈研究の到達点を、読者に示しているのである。

注

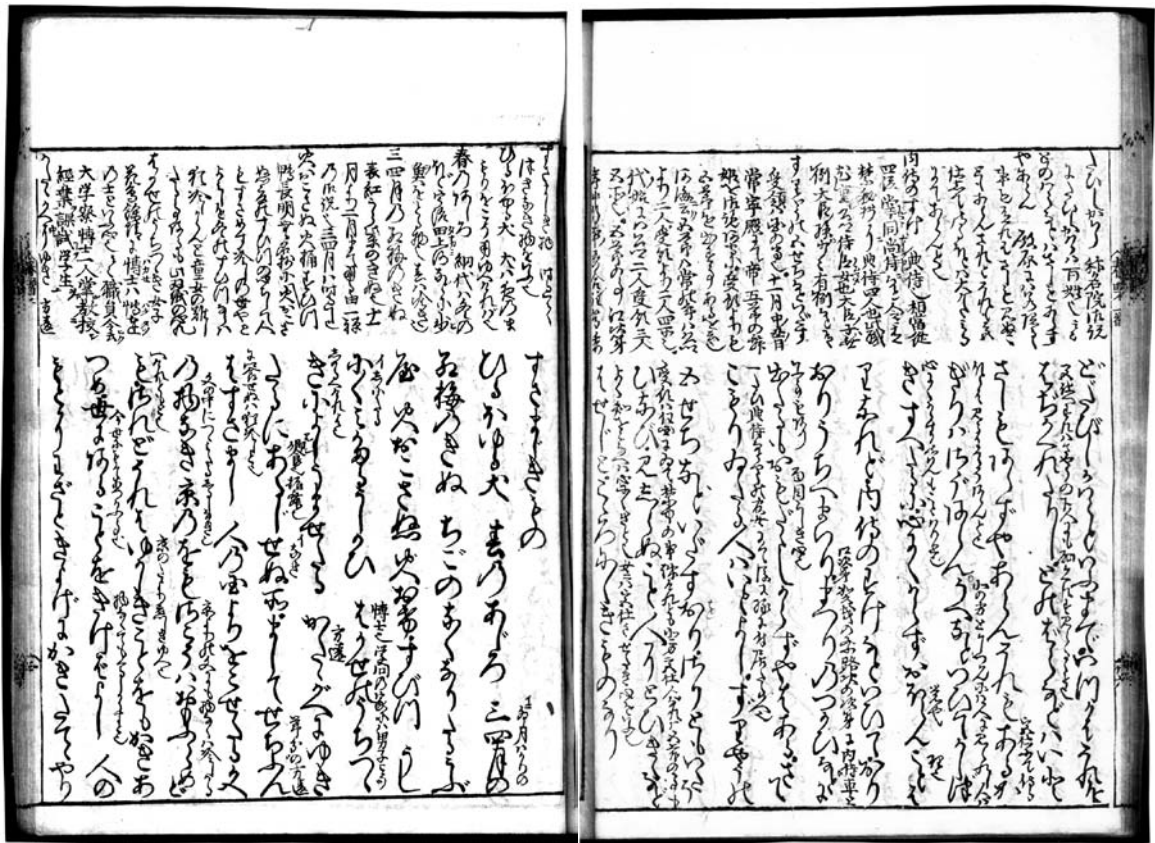
- (1) 写本では、早く、万治三年(一六六〇)のものがある。
- (2) 『光源氏物語大意』という書名が、『国書人名辞典』の加藤盤齋の項に見える。
- (3) 島内裕子『徒然草吟和抄』の注釈態度(『放送大学研究年報』第三十二号、平成二十六年)
- (4) 島内裕子『徒然草絵抄』の注釈態度(『放送大学研究年報』第三十三号、平成二十七年)
- (5) 岡西惟中の『枕草子旁註』は、先行する盤齋と季吟の注釈書を撰取しながらも、『図式』(図解)を付属している点で、興味深い注釈書である。惟中は自著『徒然草直解』にも「器物図」を付けており、どちらも古典の注釈書では珍しいスタイルである。岡西惟中の、『枕草子』と『徒然草』に対する注釈態度の研究は、今後の課題としたい。
- (6) 池田亀鑑校訂『枕草子(春曙抄)』上・中・下、岩波文庫。上巻は昭和六年三月刊行、中巻は昭和六年八月刊行、下巻は昭和九年五月刊行である。
- (7) 『春曙抄』の注釈部分の引用に際しては、適宜、私意に句読点を打ち、また送り仮名もつけて読みやすくしたので、表記や句読点など、池田亀鑑校訂の岩波文庫版と異なる場合がある。

- (8) 『文段抄』では、頭注・傍注スタイルは採らず、各章段をさらにいくつかに区切り、その区切りごとに注釈を入れている。『源氏物語』や『枕草子』のような王朝文学と比べて、『徒然草』の場合は、まず原文自体をそのまま示し、それを読んだ後に、その部分の大意や語釈を示し、その後再び、原文の続きがひとまとまりで示され、また、その部分の大意や語釈が書かれるという繰り返しのスタイルである。このようなスタイルを採ったことを、季吟は『文段抄』冒頭の総論の最後に「凡そ此の双紙の段々に又こまかに文段をわかれて、或は六節、或は三節などしるせる事は、いまだ先達の説をも承らず(下略)」と述べて、独自の工夫としている。本文には、濁点、句点、漢字の振り仮名は付けているが、主語を示すことはない。『源氏物語』や『枕草子』の場合、主語を逐次示すことが文脈の理解に必須のことであったのと大きく異なるわけで、そのことから逆に、いかに『徒然草』には会話文が少なく、たとえ会話文があっても、その主語は明確に本文から読み取れる文学であることを改めて気づかされる。
- (9) 古典俳文学大系2『貞門俳諧集 一二』(小高敏郎・森川昭校注、集英社、昭和四十六年)所収
- (10) 島内裕子『徒然草寿命院抄』の注釈態度(『放送大学研究年報』第十六号、平成十年)参照。『寿命院抄』の注釈が、主として『八雲御抄』、『枕草子』、『源氏物語』を例示しながら書かれていること、また、『河海抄』などの『源氏物語』の注釈書が活用されていることに注目した。
- (11) 島内裕子『徒然草古注釈書の方法』——『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ(『放送大学研究年報』第十八号、平成十二年)参照。林羅山はみずからの紀行文『丙辰紀行』の中で、『徒然草』第二百十一段の「万のことは頼むべからず」という思想を念頭に置きながら、自分の心境を綴っている部分があることを述べた。
- (12) 「さ」をのしづく(『樋口一葉全集』第三卷(下)、筑摩書房、昭和五十三年)

(二〇一六年十月三十一日受理)



(図版 1)



(図版 2)

Makura no Soshi Shunshosho, Its Method of annotation and Influences to Posterity

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

Among the commentaries of *Makura no soshi* (枕草子) published in the modern period, *Makura no Soshi Shunshosho* (枕草子春曙抄) by Kitamura Kigin (北村季吟) is the most circulated and influential one. This dissertation considers its method of annotation and its great cultural influences.

Shunshosho consists of the text of *Makura no Soshi* and two kinds of annotations, that is, the Tochu (頭注 notes above the text) and the Bochu (傍注 notes written between the lines of the text). The Tochu points out words having definite sources and explains official ranks, place names etc., while the Bochu paraphrases difficult expressions, points out subjects of ambiguous sentences and attaches corresponding Chinese letters to Hiragana letters in the original text for clearness's sake. Generally speaking, the Tochu offers interpretations of difficult words, while the Bochu presents contextual explanations.

Shunshosho makes broad reference to literary works such as *Genji Monogatari* (源氏物語), *Kagakushos* (歌学書 books which explain Wakas), *Yusoku Kojitsushos* (有職故実書 books which explain the customs in the Imperial Court) etc. in order to help readers precisely interpret *Makura no Soshi* as a work of literature. Sometimes it also offers didactic readings concerning how the emperor should act or how people should live.

Shunshosho is easy to understand because its explanations are clear and concise in spite of its academic nature. As it has notes to numerous passages, those who read *Makura no Soshi* have used it as the text both in Edo era and after. The present author considers the influence of *Shunshosho* over Buson's Haiku poems (蕪村の俳句) as well as its relation with Arthur Waley's translation of *The Pillow-Book of Sei Shōnagon* (1928), *Shunshosho* being fully used by modern translators of *Makura no Soshi*.